

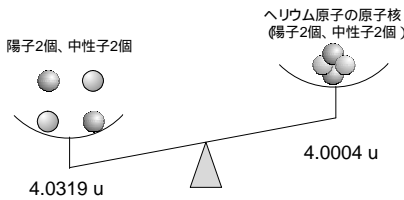
第1章 静電場

電荷の基本的性質

1. 電荷には**プラスとマイナス**の2種類あり、同種同士は反発し、異種同士は引き合う
2. 原子核や電子の電荷は、常に**電気素量** ($e=1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$)の整数倍である。陽子の電荷は常に e 、電子の電荷は常に $-e$ である。(陽子や中性子を構成しているクォークは $e/2, e/3$ の電荷を持つとされているが、単独では観測されない。)
3. いかなる物理的または化学的変化に際しても、全電荷の和は不変である(電荷の保存則)

電荷と質量の大きな違い

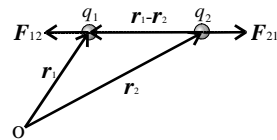
質量は保存しない! (質量素量などない)



($u = {}^{12}\text{C}/12 = 1.66 \times 10^{-27} \text{ kg}$) 原子質量単位

$$E = mc^2 \text{ (質量はエネルギーの一形態)}$$

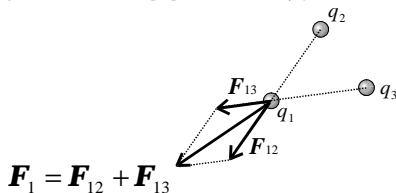
二つの電荷の間に働く力の向き



対称性より $\mathbf{F}_{12} = a(\mathbf{r}_1 - \mathbf{r}_2)$ (中心力)

作用・反作用の法則より $\mathbf{F}_{21} = -\mathbf{F}_{12}$

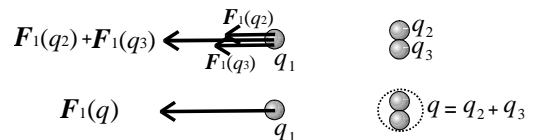
力の重ね合わせの原理



複数の力が働いている場合

$$\mathbf{F}_1 = \sum_i \mathbf{F}_{1,i}$$

力と電荷の関係



力の重ね合わせの原理より

$$\mathbf{F}_1(q) = \mathbf{F}_1(q_2 + q_3) = \mathbf{F}_1(q_2) + \mathbf{F}_1(q_3)$$

これを満たすには

$$\mathbf{F}_1(q) \propto q$$

力と電荷の関係

$$F_{12} \propto q_2 \qquad F_{21} \propto q_1$$

作用・反作用の法則より

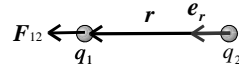
$$\mathbf{F}_{12} = -\mathbf{F}_{21}$$

したがって

$$\mathbf{F}_{12} = -\mathbf{F}_{21} \propto q_1 q_2$$

2つの電荷の間に働く力は、お互いの電荷の積に比例する。

クーロンの法則



電荷 q_2 が電荷 q_1 に及ぼす力 F_{12} は、 r を電荷 q_2 から電荷 q_1 に向かうベクトルとすると

$$\mathbf{F}_{12} = k \frac{q_1 q_2}{r^2} \mathbf{e}_r \quad \left(\mathbf{e}_r \equiv \frac{\mathbf{r}}{r} \right)$$

$$k = 10^{-7} \text{ C}^2 \approx 8.988 \times 10^9 \text{ Nm}^2/\text{C}^2$$

真空の誘電率

後の便宜のために $k = \frac{1}{4\pi\epsilon_0}$ と定義すると

$$\mathbf{F}_{12} = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q_1 q_2}{r^2} \mathbf{e}_r$$

ϵ_0 真空の誘電率

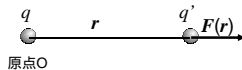
電磁気学における電場 磁場の定義

速度 \mathbf{v} で運動している電荷 q が位置 r で受ける力は

$$\mathbf{F}(r) = q(\mathbf{E}(r) + \mathbf{v} \times \mathbf{B}(r))$$

と表せる。この電荷に働く力をローレンツ力と呼び、 $E(r)$ を電場、 $B(r)$ を磁場と定義する。

クーロンの法則の解釈



<遠隔作用の考え方>

電荷 q と q' の間に、クーロン力

$$\mathbf{F}(r) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{qq'}{r^2} \mathbf{e}_r$$

が直接働く(空間は変化しない)

<近接作用の考え方>

電荷 q によって、空間にベクトル場

$$\mathbf{E}(r) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

が作られる。位置 r に電荷 q' を置くとこの電荷は電場から

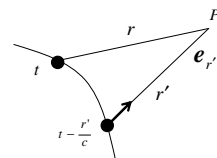
$$\mathbf{F}(r) = q' \mathbf{E}(r) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{qq'}{r^2} \mathbf{e}_r$$

が働く

任意の運動をする点電荷のつくる電場 リエナール-ヴィーヘルトポテンシャル (ファインマン物理学 3章、20章)

$$\mathbf{E} = \left[\frac{q}{4\pi\epsilon_0} \frac{\mathbf{e}_{r'}}{r'^2} + \frac{r'}{c} \frac{d}{dt} \left(\frac{\mathbf{e}_{r'}}{r'^2} \right) + \frac{1}{c^2} \frac{d^2}{dt^2} \mathbf{e}_{r'} \right]_{t = t - \frac{r'}{c}}$$

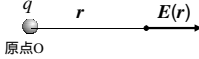
$$\mathbf{B} = \frac{\mathbf{e}_{r'} \times \mathbf{E}}{c}$$



これを重ね合わせることで、世の中全ての電磁現象を説明できる

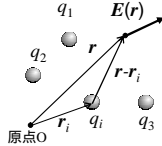
電荷の作る電場

原点Oに置かれた電荷 q が位置 r につくる電場は

$$E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$


一般に、複数の電荷 q_1, q_2, \dots が位置 r_1, r_2, \dots に存在しているとき、位置 r における電場は、クーロン力の重ね合わせの原理より

$$E(\mathbf{r}) = \sum_i E_i(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \sum_i \frac{q_i}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}_i|^2} \mathbf{e}_{r-r_i}$$

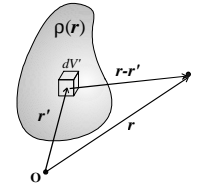


電荷分布の作る電場

電荷が連続的に分布しているとき、位置 r' の近傍の単位体積中に含まれる電荷の量を電荷密度 $\rho(r')$ で表すことにすると、この電荷分布が作る電場は

$$E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \int \frac{\rho(\mathbf{r}')}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}'|^2} \mathbf{e}_{r-r'} dV'$$

と表せる。

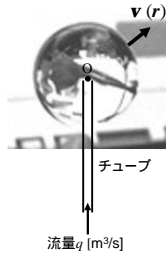


流体の速度場

原点Oから一定の割合 q [m³/s] で縮まない流体が等方的に湧き出ているとする。このとき、位置 r における流体の速度場 $\mathbf{v}(r)$ [m/s] は

$$\mathbf{v}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

と表せる。



速度場と電場のアナロジー

$$\text{電場} : E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r \Leftrightarrow \mathbf{e}_0 E(\mathbf{r}) = \boxed{\frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r}$$

数学的に等価

$$\text{速度場} : \mathbf{v}(\mathbf{r}) = \boxed{\frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r}$$

原点Oに流量 q の湧き出しがある速度場 $\mathbf{v}(r)$ に関して成立つ数学的な性質は、原点Oに電荷 q があるときの電場 (ϵ_0 をかけたもの) についても同様に成立つ。

面素を通る流体の流量

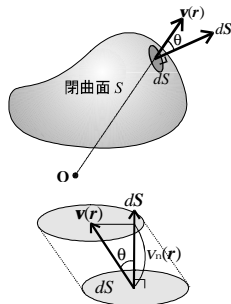
ある閉曲面 S 上の面素 dS を単位時間に通る流体の流量 df は、

$$df = \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cos \theta dS = v_n(\mathbf{r}) dS$$

面素の法線ベクトル (閉曲面から湧き出る方向を正とする) と同じ向きで、大きさが dS であるようなベクトル $d\mathbf{S}$ (面素ベクトルと呼ばれる) を用いれば、

$$df = \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$$

と簡単に表現できる。



閉曲面から湧き出る流量

閉曲面 S を通って流れ出る流量は、閉曲面 S 上の面素を通る流量の総和であるから、

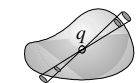
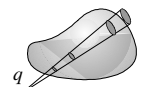
$$f = \int_S df = \int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$$

閉曲面 S の中に湧き出しが存在しないならば、

$$\int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = 0$$

閉曲面 S の中に湧き出しが存在するならば、

$$\int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = q$$



ガウスの法則

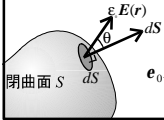
速度場 $\mathbf{v}(\mathbf{r})$ と電場 $\mathbf{E}(\mathbf{r})$ に真空の誘電率をかけた $\epsilon_0 \mathbf{E}(\mathbf{r})$ は数学的に等価



電荷が作る電場は

$$\epsilon_0 \int_S \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = \begin{cases} 0 & \text{電荷 } q \text{ が閉曲面 } S \text{ の外部にある場合} \\ q & \text{電荷 } q \text{ が閉曲面 } S \text{ の内部にある場合} \end{cases}$$

を満たす。これをガウスの法則と呼ぶ。



$\epsilon_0 \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$ は電束と呼ばれる (流体のような実態はない)